

## 11 地域高齢者を対象とした動脈硬化に関する包括的縦断的研究（東京都板橋区地域在宅高齢者コホート研究）

研究代表者名：鈴木隆雄<sup>1</sup>

共同研究者名：吉田英世<sup>2</sup>、清水容子<sup>2</sup>

施設名：国立長寿医療研究センター<sup>1</sup>、東京都健康長寿医療センター<sup>2</sup>

### 【目的】

70歳以上の地域在宅高齢者を対象として、1)本研究基金の統合研究に準じて循環器疾患発症に関する調査項目のほか、2)容易に要介護状態をもたらすとされる老年症候群、特に転倒（骨折）、失禁、低栄養、生活機能低下、うつ状態、認知機能低下を予防し、要介護予防のための包括的健診（「お達者健診」）を実施した。特に本研究では、血清ビタミンD濃度と観察期間中の死亡との関連性について縦断的分析を行った。

### 【対象と方法】

統合研究に関しては2001～2002年のベースライン調査を実施した、東京都板橋区在住高齢者（2001年コホート438名、2002年コホート931名）の合計1,369名である。また、個別研究における調査対象者は、東京都板橋区内在宅の70歳以上の高齢者で2008年に同区内で実施された「お達者健診」受診者に関して2012年3月までの追跡調査を実施し、生存分析に関する解析可能な者1,339名について分析した。調査は、個別研究として血清ビタミンD（25-OH-D）濃度の測定がなされ、その後4年間の追跡期間中の死亡を確認し、関連性について分析した。

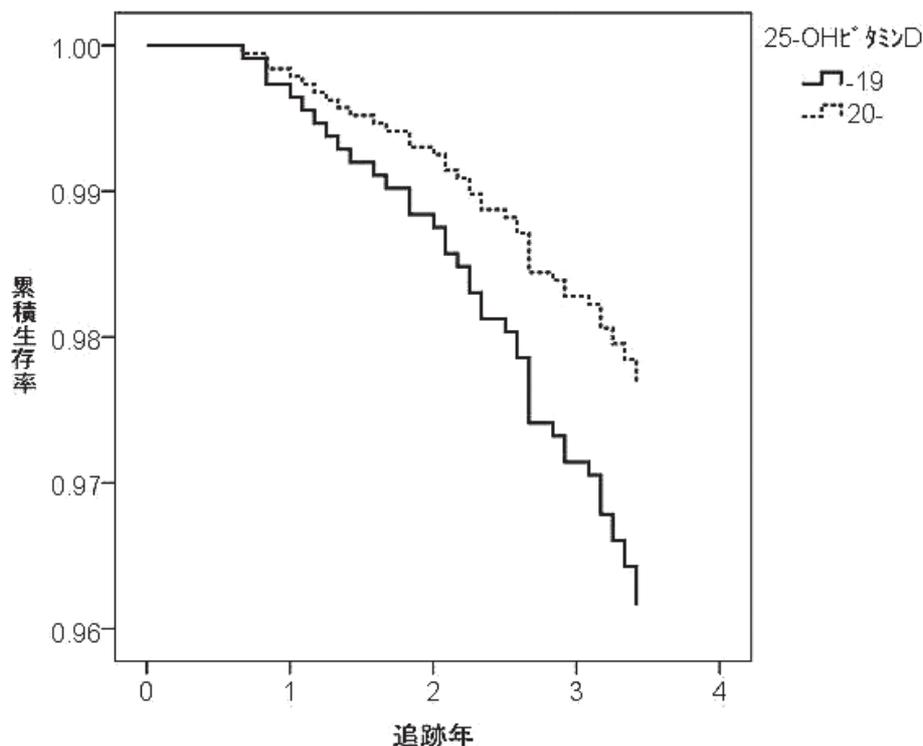


図1

## 【結 果】

### 1) 統合研究の進捗状況

ベースライン調査を実施した、東京都板橋区在住高齢者 2001 年コホート 438 名、2002 年コホート 931 名の合計 1,369 名について、2013 年 1 月末時点で脳卒中 171 名、心筋梗塞 23 名および大動脈瘤 9 名が確認登録され、各症例におけるカルテ調査等が規定通り進行中である。

### 2) 個別研究の進捗状況

2008 年追跡調査対象者女性 1,339 名をベースラインとして、その後の追跡期間中に死亡した 43 名 (3.2%) について、ベースライン時の血清ビタミン D (25-OH-D) の濃度によって 19ng/ml 以下と 20ng/ml 以上の 2 群に分けた場合の死亡発生とのクロス表を作成し、最終的な分析としてコックスの比例ハザードモデル (従属変数: 死亡=1、生存 (打ち切り)=2) を用いて関連性を分析した。その結果、血清ビタミン D (25-OH-D) 濃度について低位群 (19ng/ml 以下) 475 名 (35.5%) および正常群 (20ng/ml 以上) 864 名 (64.5%) であり、さらにそれぞれの死亡数は 21 名 (4.4%)、および 22 名 (2.5%) であった。コックス比例ハザードモデルによる生存分析を行った結果、正常群を基準にした場合の低位群のハザード比と有意確率は 1.671 ( $p=0.093$ ) であり、低下群での死亡リスクの増加は有意傾向であることが確認された (図 1)。

最近、高齢期における健康維持や転倒発生に関して血清ビタミン D 濃度の意義が注目されているが、当研究においても血清ビタミン D 濃度の低下する割合が高い高齢女性における縦断研究において血清ビタミン D 濃度の低下が生命予後にも有意な影響をもたらす可能性のあることが明らかとなり、今後の高齢者の健康対策に新たな課題を提示したと考えている。今後も同コホートについてさらに追跡を重ね、死亡例の増加を待って死亡の交絡要因も含めたより詳細な分析を行う予定である。